

北垣国道と鳥取人脈

高久 嶺之介

本稿は、第3代京都府知事北垣国道を通じて彼が私的接触を持っていた鳥取人脈がどのようなものであったかを明らかにするものである。もともと地方官僚の研究自体が少ないが、その中でも北垣といえれば必ず琵琶湖疏水工事のみが素材になる。琵琶湖疏水工事全体の時代的性格はすでに筆者も明らかにしているが、本稿は幕末以降北垣が接触した因州人（鳥取）を通じての人的関係をあきらかにするものである。北垣そして原六郎（進藤俊三郎）はもともと但馬の上層農民であったが、幕末の生野の変、そして幕末・維新の諸運動を通じて鳥取藩の人びととの接触を強め、後に鳥取藩士となる。本稿では、第1に北垣が因州藩との関係を強めることになる松田道之（正人）との関係を松田の死を前後にする時期の状況を中心に描く。第2に原六郎は維新後イギリス留学を経て、帰国後事実上第百国立銀行をスタートに経済活動を進めるが、第百国立銀行は鳥取藩を背景にして設立され、原は銀行学の知識を生かし、鳥取池田家の経営に深くかかわっていく。また、原の再婚は北垣の紹介で行われ、結婚式では沖守固や河田景福などの鳥取人脈が尽力することになる。第3に旧鳥取藩士河田景与・景福と北垣との関係である。この兄弟、とりわけ琵琶湖疏水建設計画の中で滋賀県大書記官河田景福が北垣との関係をどのように維持していくかは不明な点が多いのでできる限り明らかにする。最後に、「鳥取池田家」の経営に北垣がどのように関わったかを断片的に触れたい。

はじめに

第三代京都府知事北垣国道は、幕末の激動の中で尊王攘夷運動を通じていつの時点かは不明にしても鳥取藩士となり、明治になって政府のさまざまな役職を経て、1881年（明治14）京都府知事に抜擢される人物である。¹⁾ 北垣は、天保7年（1836）但馬国養父郡能座村（現兵庫県養父市）の庄屋北垣三郎左衛門・母リキの長男として生まれ、幼名捨蔵、後に晋太郎と改名した（その後北垣は明治初期に国道と改名）。北垣の家は、前嶋雅光氏の研究によれば、父の代まで代々庄屋をつとめた家柄であったが、文政4年（1821）に佐中村進藤丈右衛門（原六郎の生家）に対し、前年借受の銀1貫10匁5分の返済延期

証文を入れているところから、このころから没落過程にあったらしい。また、万延元年（1860）の頃、北垣晋太郎の持高は18石程度であったという。なお、父三郎左衛門は北垣19歳の時死去し、晋太郎が未成年のため村方三役は北垣家を離れる。²⁾北垣は、天保14年（1843）7歳で池田草庵の立誠舎に入塾し（八鹿村）、後に弘化4年（1847）青谿書院（宿南村）となってからも引き続き在塾し、在塾20年におよんだ³⁾。この塾には、北垣と幕末行動を共にする進藤俊三郎（後の原六郎）、西村哲二郎（太田二郎）がいた。この3人が、雄志を抱いて、青谿書院を退いたのは文久3年（1863）で、北垣を最年長としてそれぞれ20代なかばから10代後半であった。⁴⁾そして、この3人がこの年10月但馬の生野の変にかかわっていく（ただし、進藤と西村は生野の変の現地ではなく京都での武器調達が任務ではあったが）。

生野の変でも多くの人間が死亡・捕縛（後にほとんどが斬殺）される中で、この3人は生きのびた。しかし、西村哲二郎は、慶応2年（1866）7月、偶発的要因により自害をする⁵⁾。こののち北垣と原は、松田正人（道之）の推挙によって、農民から鳥取藩士となったといわれており、明治以後北垣は官界に、原は実業界の道を進む。彼らは但馬の農民身分から鳥取藩士になるが⁶⁾、北垣および原六郎にとってこの武士身分への移行がその後の動向に大きな影響を与えていく。

本稿は、北垣国道が鳥取藩士としてその後の活躍の素地と人間関係をつくっていったことを描く。具体的には、第1に、松田道之との関係、第2には原六郎との関係、第3に河田景与（佐久馬）・景福兄弟との関係、そして最後には史料的制約により深く踏み込むことはできないが「鳥取池田家」との関係、総じて鳥取人脈がどのようなものであったかを明らかにする。

なお、接触の密度からすれば、原六郎との関係が最初にくるべきであるが、松田との関係が割合時間的に短いために先ず松田を最初に取り上げる。また、鳥取人脈の出発点は、北垣・原の生野の変であるが、これは北垣にとってにがい過去であると思われる、慎重に扱う必要があり、別の機会としたい。

なお、ここでいう鳥取人脈とは、鳥取を通じての人的関係のことである。この紐帯は、薩摩閥、長州閥のように、政治的に実態をともなったものではない。北垣のように政治的には伊藤博文・井上馨などと深く接触しながら、もともと但馬の一農民であったものが維新の動乱の中で鳥取藩士になったことにより、鳥取を核とする精神的紐帯の中にはいることになる。

また、明治5年（1872）までは、和暦を優先とし、以後は西暦を優先とする。

1 松田道之

幕末の生野の変の時の松田正人（道之）について、北垣は1912年（明治45）3月11日、維新史料編纂会での講演記録「但馬一挙の真相」の中で述べている。すなわち、松田は野村和作（靖）の説に同調し、大和の勢力を助けるために但馬で決起することをすすめるが、大和の天誅組の破陣が発覚した時点で、沢宣嘉・平野国臣一行が因州に潜入することを勧告する。平野・北垣はこれに従おうとするが、南八郎（河上弥市）・戸原卯橋の決起説が勢いがあり、意見の調整がつかないまま生野の変がおきる。⁷⁾ この前後の松田について、北垣は事実経過を期すのみで、とくに評価を下していないが、生野の変の武器調達を担当した原六郎は割合率直に次のように回想している。

夫れから前に述べた長州藩の野村和作、因州藩の松田正人といふ人、此人は鵜殿（大隅一高久）といふ家老の家来で陪臣であつたが、かういふ人々か我々の相談相手になつてくれた。松田は実に立派な人物で、明治になつてから道之と云ひ、その後ずっと親しくしてゐるが、なかなか仕事の出来る人であつた。私達は松田を最もたよりにしてゐた。⁸⁾

このように原は松田を評価しているが、野村については、すでに文久3年（1863）10月原が武器調達に京都に立ち寄った際に、祇園で芸者遊びをしていたことを怒るなど人物評価はかなり低い。⁹⁾ おそらく実業家の原だけではなく、容易に評価を表に出ださない北垣にしても同様であつたのではないか。維新後、野村は名を野村和作から野村靖にかえ、岩倉具視に随従して欧米各国を視察、その後神奈川県令、通信次官を経て1894年（明治27）第2次伊藤博文内閣の内務大臣になる。この時、北海道庁長官である北垣国道の陳情相手として野村ははじめて北垣の日記「塵海」に登場するが、「塵海」を見る限り、北垣が野村靖に対して単なる陳情相手以上の感情・雰囲気のみいだすことはできない。¹⁰⁾ したがって、北垣をめぐって幕末から明治につながる人物として野村靖（和作）を位置づけることはできない。北垣は井上馨、伊藤博文、森寛斎¹¹⁾との良好な関係からして一見長州閥のように見えるが、それ以外の長州の人間との人的関係はもちろんあるが特に強いものではない（ただし晩年は伊藤博文との関係については若干希薄になる印象がある）。

ここで、維新後の松田正人（道之）の経歴について、『百官履歴』上巻および歴代知事編纂会編『日本の歴代知事』第一巻、第二巻（下）¹²⁾により簡略に触れておこう。

松田道之は、『明治維新人名辞典』によれば、天保10年（1839）5月生まれ、北垣が3

年ほど年長である。¹³⁾ 明治以後、いつの時点からか不明であるが、道之と改名した松田は、明治元年（1868）4月28日徴士となり、同年閏4月24日権判事、そして4日後には京都府判事、そして7月13日には京都府大参事になる。明治4年11月22日には大津県令となり、同5年正月19日大津県が滋賀県となった時に滋賀県令となった。松田は天保10年（1839）5月生まれであるから、この時32歳の若さである。松田の滋賀県令の時代は1875年（明治8）3月までわずか4年と短い、その間あまり無理の無い柔軟な行政運営であったことが特徴的である。¹⁴⁾ 滋賀県令の後、1875年（明治8）3月23日、大久保利通によって内務大丞に抜擢され、同4月2日戸籍頭兼務、同5月10日地租改正局四等出仕兼任となり、同年5月14日には琉球藩に差し遣わされ、廃藩置県を断行する（琉球処分）。翌1876年（明治9）1月25日には一等法制官を兼任する。1877年（明治10）1月11日内務大書記官になり、すぐに太政官大書記官兼任となるが、1878年（明治11）年3月7日地方官会議御用掛になる。同年4月8日地方官会議幹事を勤め、12月12日東京府7代目知事となった。1880（明治13）年1月5日には地方官会議幹事長となっている。順調すぎる上昇と言っている。

北垣の日記「塵海」は、今のところ1881年（明治14）10月1日から現存するが、その頃には、松田は大抜擢で東京府知事になっていた。それから松田が1882年（明治15）43歳の若さで早逝するまで、北垣が最も信頼する人間であった。「塵海」を見る限り、東京に行く際には、必ず会っていたようである。12月1日、北垣は朝9時に東京に着くが、その日の内に松田を訪れている¹⁵⁾。1882年（明治15）4月は2回（4月13日と16日）東京に行った際には必ずあっている¹⁶⁾。

手紙での連絡も頻繁であった。1881年（明治14）10月10日には三条実美太政大臣と伊藤博文参議と「松田道之氏」の3人に向けて、「書留郵書」を送っている。これは「頗ル機密ニ係ル」ゆえに、くわしくは日記に書いていないが、ただ「開拓使官（有）物払下一条処（分）ノ事。政府将来ノ組織ニ係ル事」とのみ記している。¹⁷⁾ これから1日後の10月11日、御前会議で立憲政体に関する方針、開拓使官有物払下げ中止、大隈参議罷免などを決定する（明治14年政変）。「書留郵書」を送った翌日には、明治14年政変がなされているのだから、「書留郵書」の意味はそれほどの意味はなかったであろう。

この間、松田とは関係なく北垣に東京からはさまざまな情報もたらされた。10月14日松方正義内務卿より暗号電報「去ル十二日、勅諭ヲ以テ国会開設ノ儀、来ル明治二十三年ト定メラレ、即夜各地方エ公布アイナリタリ、心得トシテ電報ス」があった。¹⁸⁾ 17日には、10月13日付で「明治二十三年ヲ期シ、議員ヲ召シ国会ヲ開」という勅諭もたら

された。¹⁹⁾ 22日には、念押しのように「過ル十二日勅諭、国会開設二十三年ヲ期シトアルハ、二十三年ニ至リ始テ開設ノ御主意ナリ」という松方内務卿の暗号電報があった。²⁰⁾

一方、この年北垣ら京都府の官吏は、一つの接待に忙殺された。イギリス皇孫の来京である。京都府には11月5日より11月9日の5日間であったが、その準備が9月から始まっていた。慰労の宴などが終わるのが11月21日である。²¹⁾

12月1日、内務省諮問会のため、北垣は東京に行く。そして、東京に着いたその日の午後4時には松田を訪れている。翌日午後4時に伊藤参議を訪問するが、「閑談」し、午後11時に帰る。この間約7時間という長時間。話の内容は、昨年12月からの政治談議であった。すなわち大隈建議、憲法制定、開拓使官有物払下げ、大隈参議が職を辞するまでを伊藤は語った。「前途一死ヲ以テ国ニ当ル。惟内部ノ破壊ヲ恐ル、ノミ。成ルモ成ラサルモ、国家ノ忠臣タランコトヲ期ス」と結んでいる。²²⁾ 1882年(明治15)3月、松田は、その後も伊藤博文の洋行の情報を北垣に電報等で送った(3月5日、3月8日)。²³⁾ 北垣が松田と最後に会うのは、1882年(明治15)4月13日、16日である。²⁴⁾

1882年(明治15)年7月6日、北垣に突然の悲報が入る。

午前九時十分七条停車場ヲ発シ、十一時前大坂着、^(宰平) 広瀬氏ヲ訪フ。

午後二時造幣局泉布館ニ至リ、^(親) 松方大蔵卿ニ面会、松田東京府知事凶訃ヲ大蔵卿ニ聞キ、歎惜痛悲ニ堪エス。其電報ニ云、今日六日午前七時松田東京府知事死去云々。²⁵⁾ 「歎惜痛悲ニ堪エス」という悲痛の表現は自分の母(リキ)が1886年(明治19)4月22日に「類似コレラ性」にかかって死去する時以外は、あまり見られない表現であった。²⁶⁾

その後、北垣が体調を崩す。大坂で松田の早逝を知った北垣は、「午後五時ヨリ汗寒腹痛、強メテ宴会ニ列ス。腹痛益々甚シ。八時半席ヲ辞シテ去リ、九時十分梅田ヲ発シ、十一時寄寓。腹痛水瀉甚シ。」という状態になった。²⁷⁾ 翌7日は「病氣不出」、8日も9日も同様である。(ただし、9日には来訪者はいて、河田景福・広瀬宰平・伊庭貞剛が北垣家を訪れたが、会ったかどうかは定かでない)。10日は、「病ヲ押シテ出庁」するが、11時に退庁し「松田氏ニ弔慰書ヲ送ル」。²⁸⁾

体調を崩すことは偶然としても、松田の死は、かなり衝撃であったようである。

北垣は、この後、京都での松田の追悼の式典のために動いてゆく。7月17日、月曜日ではあるが休暇を取って相国寺に行き、「松田氏ノ祭典ヲ談ス」。²⁹⁾ そして、7月30日の日曜日には、相国寺において、松田道之の招魂祭を執行する³⁰⁾。11月12日の日曜日には、大津に行き、松田東京府知事の祭典に出席する。³¹⁾ 12月10日には、地方官の会議の

ため、船で横浜に着し、沖守固を訪問し、その後東京に向かった。明治政府は明治14年政変の後でもあり危機意識を持っており、井上馨参議邸を訪れた際には、地方官召集の理由が語られ、地方官中にも「内務ノ施行ニ服セサルノ景況アルカ如ク、甚タ懸念ヲ免レス」という状況などが語られた。ほとんどその話題であるが、「松田家計ノ談」もあった。³²⁾ 14日には、「松田道之履歴」のことにつき相談会が築地隅屋で催された。参加したのは、北垣を別にすれば、松田の後に急遽就任した芳川顯正東京府知事、島惟精岩手県令、藤村紫朗山梨県令、沖守固神奈川県令、松平正直宮城県令、酒井明德島県令の6知事・県令である。³³⁾ 12月17日には早朝より、大久保利通、松田道之の墓を参拝した。そしてその足で河田景与の家を訪問している。³⁴⁾

12月25日には、午後5時に井上参議邸におもむき松田家のことについて会合した。この時は「沖守固・原六郎等」が来会した。午後7時には松田家に至ったが、参加したのは井上馨・北垣・沖守固・原六郎の4人であった。後述するように、井上をもとに沖・原は1876年9月のロンドンでの経済・貿易問題での研究仲間であり、そして井上馨を除けば完全な鳥取人脈である。³⁵⁾

そこでは、次のように決めた。

右松田家ニ会シ議決、左ノ如シ。

公債証書壹万五千円、此利子千百五十円ヲ家貸トシ、月々定額五十円ト定メ、此年費六百円トス。残り五百五十円ヲ積ミ置キ、信敬十八九才ノ後ノ学資トス。

外ニ公債証書三千六百円、内貳千円松田次郎、千六百円松女ノ資産トス。

但シ右ノ割合ハ仮定ニ付、分与ノ額ハ後日確定ス。

信敬ハ、明年一月ヨリ築地米人学校ニ入学セシム。

木山市造ヲ免シ、倅橘次ヲ入ル。

遺族資金ヲ集ム。

右決定ノ上、各退散ス。³⁶⁾

松田の突然の急逝は、松田家の家族の将来を心配するものであったろう。松田に恩義を感じていた北垣・原、さらに沖守固という鳥取関係者は松田家の遺産相続計画を建てることによって遺族の将来を支えようとした。北垣は、東上中の27日に再度松田家を訪れている。これ以後の「塵海」での松田道之に関する記事は、2つある。ひとつは、1883年(明治16)10月15日に府庁に本願寺の赤松連城が来て、本山財務について話をし、その際に北垣が赤松に「松田氏遺族送付金」のことを話をしたというものである(具体的中身は不明)。³⁷⁾ もうひとつは、北垣が1894年(明治27)6月6日に北海道庁長官とし

で東京にいた時、松田道之の十三回忌法会に参加した時である。³⁸⁾

北垣および原はその後も松田家とかかわり続ける。

1892年(明治25)9月17日付井上馨宛て原六郎書簡には、イギリス留学中の松田信敬について河瀬真孝英国公使の手紙が添えられ、松田信敬は学事において余程満足の進歩であるが、今後滞英資金の問題で帰国せざるをえないことなどが記されている。原は、英国教師の意見書を添え、河瀬真孝英国公使の書簡を井上馨に送った。原が、松田の遺児に付いて世話をしていたことをうかがい知れる。³⁹⁾また、1899年(明治32)3月9日付の「塵海」には、「松田信敬来り、身上談」⁴⁰⁾の記事があり、3月12日付には、「原六郎ヲ訪フ。天龍寺寄附ノ事、松田信敬身上ノ事ヲ相談ス。一時旅寓ニ帰ル」⁴¹⁾とあり、3月26日には、「午後原及ヒ松田(信敬)ヲ訪フ」⁴²⁾とある。いずれも、北垣が東京にいた時である。松田信敬の「身上」の中身はわからない。しかし、このように北垣と原は松田道之の遺族とかかわり続けた。

2 原六郎

2.1 第百国立銀行

文久3年(1863)の生野の変後、北垣と原は因州および長州に逃れてゆく。慶応4年(1868)1月の戊辰戦争で、原六郎は、隊長河田佐久馬(景与)の下で、鳥取藩附属丹波山国隊の司令士として働いた。この原六郎については、仲村研「原六郎と同志社」(『同志社談叢』第5号、1985年)があり、氏の研究が本来の日本中世史だけではなく、丹波山国隊の研究にもあることから、北垣国道の日記「塵海」を使用していない以外は(まだ『北垣国道日記「塵海」』は出版されていない)、もっともまとまった研究となっている。⁴³⁾なお、丹波山国隊の「東征」中、北垣国道はこの頃の名称である「柴捨蔵」の名で隊中取締の藤野齋と接触している。⁴⁴⁾以後、原六郎の経歴は、仲村氏の研究との重複もあるが、特に断りが無い限り、原邦造『原六郎翁伝』(とくに上巻)による。さて、原六郎は但馬国朝来郡の大地主進藤俊三郎から文久3年(1863)生野の変後原六郎と名を変え、明治2年(1869)5月、鳥取藩士になっている。⁴⁵⁾つまり武士身分になったのである。同年9月、三田尻海軍学校で教えを受けた大村益次郎が襲われ、11月大阪病院で亡くなった。このことが後に原の方向転換の動機になる。明治3年11月、30万石以上の15大藩に人員2人を選んで海外視察が命ぜられた。因幡藩(鳥取藩)からは権大参事池田徳潤と原六郎が選ばれた。明治4年(1871)5月、原らは横浜からサンフランシスコに

出港した。⁴⁶⁾ この間に日本では廃藩置県が断行され、公費留学生は帰国費用以外は支給されなくなった。しかし、原はアメリカに残り、コネチカット州のイェール大学に入学して、経済学・金融学を学び、その後イギリスに渡りキングス・カレッジで経済学・社会学・銀行学を学び、1877年（明治10）に帰国した。帰国後、原は富岡製糸工場の払下げ一件にかかわるが、これは成功しなかった。後述するように1878年（明治11）、旧鳥取藩主池田家を中心として第百国立銀行を設立し頭取になる。1880年（明治13）には東京貯蔵銀行を設立し、頭取になる。さらに、1883年（明治16）大蔵卿松方正義の要請により横浜正金銀行の第四代頭取になるなど、この後多くの金融機関や企業をひきいていくことになる。

さて、まず、原の日本での経済活動が事実上第百国立銀行から始まることに注目したい。『原六郎翁伝』上巻によれば、旧鳥取藩では、旧藩侯が率先して有志者を募り、公債約50万円を資金として一大国立銀行の設立を計画した。しかし、当局は50万円の資金は過大に過ぎるとして、容易にこれを許可せず、やむなく右の資本を二分して、鳥取に一行と東京に一行の国立銀行を分立することが決められた。この計画には、旧家老河田景与が尽力し、自ら鳥取第八十二銀行の創立を担当した。一方東京の第百国立銀行を担ったのが原六郎であった。1878年（明治11）3月24日、原は旧藩主池田家（輝知）の家令吉田忠巳、および水戸藩の川崎金三郎氏等7名とともに当時東京府下日本橋浜町2丁目3番地に居住していた藩侯の分家池田徳潤邸に集まり、国立銀行創立の事を協議した。この日発起人側で具体案を練り、「資本金は公債証書、紙幣取り混ぜ二拾五万円となし、内五万円は之を発起人側で出金し、残金二十万円は一般株主から募集すること」を定めた⁴⁷⁾。そして、「鳥取藩に土籍を有する翁（原）が久しい海外留学の結果銀行に関する専門の知識を習得して帰朝」⁴⁸⁾したことは、当然原が中心にならざるを得なかった。

3月28日、国立銀行設立願を大蔵省へ提出し、6月8日、第百国立銀行が創立許可され、8月5日、原は第百国立銀行の初代頭取となる。取締役には吉田忠巳、河崎金三郎、高崎長平、円城寺芳蔵の4人が当選し、支配人には宮部久が就任した。吉田・河崎は鳥取池田家の家令である。また、当日集まった株主は原のほか13名で、その内池田家を代表する吉田忠巳・河崎直胤両氏によって総株数の約84パーセントが占められたから、事実上鳥取池田家によって当初の第百国立銀行は担われたことになる。⁴⁹⁾ 原の所有株数は、わずかに70株、7000円で全体の約3.5パーセントに過ぎなかったが、実質的に経営の舵取り役であった。なお、1879年（明治12）1月段階での第百国立銀行株主の姓名は、吉田忠巳、河崎真胤、河崎金三郎、原六郎、高崎長平、安田善次郎、円城寺芳蔵、河田景

与、宮部久、白井清文、須知正直、高橋利兵衛、市川好三、木島文六である。⁵⁰⁾

1881年(明治14)9月、第百国立銀行は、鳥取県下邑美郡掛出町(同年11月元魚町、15年12月二階町へ移転)に支店を開設した。第百国立銀行が鳥取藩を背景として設立した関係上、株主にも同藩関係者が多かった。この開店には、原が同地に出張して準備を整えた。ところが、鳥取には第百国立銀行の姉妹銀行である第八十二国立銀行があり、すでに県の金庫を預かっていたので、両者協議の上、共同で鳥取県御用為替を取り扱うことになった。さらに双方協議の上地方税為替方は第八十二国立銀行において、また官金為替方は、第百国立銀行において取り扱うことに協定を結んだ。⁵¹⁾

このようにして、原は銀行学の知識を生かし、鳥取池田家の経営に深くかかわっていく。1883年(明治16)3月25日、原は第百国立銀行頭取ならびに取締役を辞す。そして大蔵卿松方正義の要請により横浜正金銀行民選取締役に選挙され、頭取に就任する。ただし、その後も第百国立銀行の株主ならびに役員の内なる希望により、永く顧問格として同行の経営に参与し、後進の指導に力を注いだ。⁵²⁾

実は、鳥取池田家にかかわったのは原だけではない。北垣も第百国立銀行ではないが池田家に深くかかわっていた。1882年(明治15)3月13日付「塵海」には、「原六郎・河崎真胤エ書留郵書ヲ送ル」とある。⁵³⁾ また、同年12月7日、海陸軍拡張のため増税不可避を理由として地方官が東京に召集された際、北垣は急逝した松田道之の家の後始末などで動くが、12月23日池田公邸に参列した。同日付「塵海」には「午後二時、向鳥池田公邸ニ参ス。原六郎・勝部静男・河崎真胤会シ、該家政ノ事ヲ議ス」⁵⁴⁾ とある。議題は、鳥取池田家のことであった。河崎真胤は池田家の家令であり、勝部静男は鳥取池田家の関係者である。河崎真胤は、北垣と親しかったようであり、1887年(明治20)6月17日の日記「塵海」には「旧主家令川崎真胤父子来訪ニ付小宴談会」^(河) とある。⁵⁵⁾

これ以外、原六郎あるいは沖守固など、旧鳥取藩関係者などの記事が「塵海」にはあるが、鳥取池田家にかかわったものとはいえないようである。

2.2 原の婚姻

ここで、原の私的問題について触れておこう。原六郎の再婚である。この再婚が北垣との結びつけをさらに強めたからである。ただ、原の再婚については、『原六郎翁伝』中巻および仲村研氏の研究でも触れている。したがって、ここではこれまでの研究で使われていない「塵海」の関係記事を中心にみておこう。

原六郎は、遠縁にあたる橋本安佐と結婚し、一女秀子がいたが、1885年(明治18)離

別していた。⁵⁶⁾

北垣の日記「塵海」に原六郎の再婚の話が出るのは1887年(明治20)のことである。『原六郎翁伝』中巻によれば、山陽鉄道会社の用件で原は関西に出張した時、2月21日京都の北垣を訪ねると、北垣は大和の名家土倉庄三郎の長女富子の話をもちだしてきた。同夜北垣邸の晩餐会で同志社女学校の女生徒数名に交じって富子もその席に列していた。3月3日、原は大阪銀水楼で北垣とともに富子の父土倉庄三郎に会うが、本人卒業まで猶予を乞うことなどを条件に結婚の承諾を得た。⁵⁷⁾ 3月1日、北垣は土倉に対し、郵便で「書留原六郎氏尊属ノ家系ヲ報知ス」⁵⁸⁾をおこなった。そして10月15日、原と土倉富子の「結婚契約書調印結納式」が行われるが、この式の立会人は「塵海」では「北垣国道・北垣種子・土倉庄三郎・土倉寿子」の4人である。⁵⁹⁾そして、翌1888年(明治21)2月25日京都市内最大のホテルであった祇園中村楼で、新島襄の司式で結婚式が行われるが、媒酌人は北垣国道、「日頃懇意な沖(守固)神奈川県知事の奔走で準備万端整」えて立食の純洋式でおこなわれた。⁶⁰⁾『新島襄全集』10巻にあるアーサー・シャバーン・ハーディー宛の新島襄書簡は、「花嫁はわれらの知事夫人と六人の乙女にかしずかれ、花婿には滋賀県の元副知事がつきそいました。多数の名士が出席するなか、キリスト教による厳粛な結婚式は深い感銘を与えました。」⁶¹⁾と記す。「滋賀県の元副知事」とは、元滋賀県書記官である河田景福(河田景与の弟)のことであり、河田景福は後述する如く、北垣と親しく、しかも鳥取人脈であった。要するに、原・北垣・沖・河田景福という完全に鳥取人脈が中心となった挙式であった。北垣国道の日記『塵海』には、1888年(明治21)2月の結婚式の時期の記事はないが、1887年(明治20)の5月～10月までの結納式までのこの結婚式準備の記事はかなりある。この期間で注目されることは、結婚式の司式をつとめる新島襄と原六郎が関係を深め、大学設立募金の確約を原から引き出すことである。それを1887年(明治20)6月の「塵海」で見ると、「新島襄東行ニ付、原六郎エ添書ヲ送ル」(6月10日)、「原六郎・新島襄ヨリ来書、学校寄付金ノコト」(6月21日)、「同志社加藤勇次郎来タリ、原六郎寄付ノコトヲ具申ス」(6月22日)、「同志社監事加藤勇之助(勇次郎)来タリ、原六郎寄付ノコトヲ謝シ、且ツ学校計画ヲ具状シタルニ付、原六郎ニ書状ヲ送ル」(6月23日)。この5日後に「原六郎婚儀結納ニ付、契約書交換ノコトヲ談ス」(6月28日)となるわけである。⁶²⁾原六郎の大学設立募金の状況を、北垣が丁寧に書きとめていることは、北垣自身が大学設立運動を積極的に支援していたことを示している。⁶³⁾

なお、原は、大学設立募金として6,000円を約束した。この額は渋沢栄一と並んで最高

額であった。しかし、この6,000円をめぐる原と新島で、軋轢を生み出すことになる。1888年（明治21）11月24日の新島の徳富蘇峰宛の書簡によれば、この時点でも寄付金は支払われなかった。原は6,000円を手元に置き、これを元金として利殖し、元利を寄付する方が同志社にとって利益になるだろう、との考えであった。これに対し、新島の考えは、「実物握ラザル上ハ縦令少々位多分ノ利子ヲ得ルモ決而安心難申」く、その間に原にもしものことがあれば、どうなるか懸念がないわけではない、また原氏のようにすれば、他人もこれを手本とするだろう、という危惧もあった。結局原の6,000円は支払われず、仲村研氏の研究でも1889年（明治22）末までは支払われなかった。⁶⁴しかし、田中智子氏の最近の研究により、この問題がようやく明らかになった。田中氏によれば、「6,000円の申し込みをしていた原は、1893年度に1,000円、1894年度に1,000円を支払うが、『明治三十年名簿』作成後になって、正金銀行株券及整理公債で残り4,000円をようやく完納し、「殊に深く感謝」されている」とのことである。⁶⁵

原の再婚後、原と北垣がより緊密さを増したように見える。

1889年（明治22）12月31日の「塵海」には、原六郎より女兒出産の知らせがあり、北垣は「祝賀ノ郵書」を送る⁶⁶。1892年（明治25）4月4日には、めずらしく東京で原六郎に招待され、原と同伴で「女楠演劇」を歌舞伎座で観る。この演劇は北垣を大いに感激させたようで（楠木正成の戦死の報に際して、楠の母が正行の死を警め籠城の計画を尽くしていく）、父ではなく母に特別な感情をもっていた北垣の感情を表しているかもしれない。⁶⁷

北海道庁長官時代の1894年（明治27）3月には、天皇・皇后の銀婚式、内務省地方官集会等の間をぬって、11日の日曜日は、「原氏ト上野ニ遊フ」⁶⁸というおそらく二人だけの遊覧をした。

北垣と原との関係は、以上のような関係である。鳥取人脈ではあるが、ともに但馬の出身であり、途中から鳥取人脈に参加した北垣と原の幕末以来の関係の強さを示しているよう。

3 河田景与・河田景福

3.1 河田景福

北垣にかかわる鳥取人脈として、次に指摘しておきたいのは旧鳥取藩士の河田景与・河田景福兄弟である。河田景与（佐久馬）は、文政11年（1828）10月生まれで、北垣は天

保7年(1836)8月生まれであるから、北垣は8歳ほど年少である。一方景福(精之丞)は天保6年(1835)年3月生まれで、北垣は9カ月ほど年少である。⁶⁹⁾

北垣が京都府知事になった1881年(明治14)年には、河田景与は元老院議官であり、東京にいた。むしろ、景与の弟河田景福が滋賀県大書記官として、比較的身近にいた。したがって、まず河田景福からとりあげよう。

1906年(明治39)9月11日「旧友同志友正四位足立正声」と「男爵正三位北垣国道」の連名で内閣総理大臣西園寺公望に、河田景福が「一昨年以来大病」により特別の御詮議をもって生存中位階昇叙の榮転を蒙るよう懇願書を提出した(国立公文書館デジタルアーカイブス)。河田景福の死の3か月前のことである。

この懇願書に書かれた維新以前の河田景福の経歴は次のようである。「右ハ初メ精之丞ト称ス、旧鳥取藩士ニシテ故子爵河田景与ノ弟ナリ、世々山城伏見藩邸ニ住ス、少クシテ勤皇ノ志深ク国家多難ノ際兄景与ト共ニ諸有志ニ交リテカヲ王事ニ尽ス、文久三年八月兄及同志士ト旧藩要職ニ在テ藩主勤皇ノ志ヲ沮害スル者数名ヲ斬テ之ヲ朝廷ニ訴ヘ、退テ罪ヲ東山ニ待ツ、已ニシテ藩主ソノ罪ヲ宥メ、之ヲ藩邸ニ禁錮ス、元治甲子ノ変ニ方テ藩命アリ、景福等ヲシテ禁闕ヲ守衛セシム、長州ノ兵敗ルハニ及ヒ、又各所ニ拘禁セラル、其間死ニ処セラレントスルモノ屢々ナリ、慶応二年ニ至リ同志ト破獄シテ西走シ、景福ハ途中ヨリ身ヲ潜メテ上京シ、薩摩藩邸ニ匿ル、是ヨリ益々苦心、王政復古ノ事ニ周旋奔走シ、遂ニ明治ノ盛運ニ遭遇シ、皇師ノ東征ニ従フヲ得」。⁷⁰⁾

北垣が懇願書の申請者の一人になっている以上、明治以前から接触があったとみるべきであろう。足立正声は、鳥取藩士、文久3年の本圀寺事件に参加、長州藩諸隊の南園隊に加わり、大村益次郎から西洋軍学を学んだ。明治元年、明治政府に出仕し、刑法官書記、判事試補、伊那県大参事、内務少書記官、社寺局長などを歴任。1878年(明治11)宮内省に転じ、東宮主事など宮内省の役職を歴任した。⁷¹⁾

ひきつづき『百官履歴』下巻で明治以降の河田景福の経歴を見ておこう。

明治元年(1868)7月9日、伊勢度会府判事史補になり、同年8月22日に徴士で度会府権判事になり、明治2年6月2日には度会県大参事、明治4年12月4日兵部省七等出仕、明治5年3月海軍省七等出仕、同年11月18日には海軍省六等出仕、1873年(明治6)3月7日には海軍主計大監になり、龍驤艦乗組を仰せつかる。そして3月9日に外務卿副島種臣特命全権大使として清国に差し遣わされ龍驤艦乗組出張を仰せつかる。同年7月26日帰朝する。1874年(明治7)4月9日、台湾蕃地事務局御用掛、1876年(明治9)8月31日海軍主計中監に任ぜられる。1880年(明治13)3月15日滋賀県大書記官にな

る。⁷²⁾

北垣が京都府知事になるのが1881年(明治14)1月、そして北垣の日記「塵海」が現存しているのが1881年10月1日からである。その10月2日日曜日に「午前十時、河田景福氏一家来訪」という親密ぶりが注目される。⁷³⁾ さらに、11月13日の日曜にも河田景福が来訪し、11月20日の日曜には朝から日没まで嵐山洗心庵で英国皇孫接待の慰労会が13名の近隣各府県の官員を招いて開かれるが、その内滋賀県からは河田景福ただ一人出席で、日没まで長時間開かれる。⁷⁴⁾ 1882年(明治15)2月5日の日曜日には、大津の河田景福の招待により北垣が国重正文大書記官・谷口起孝(大書記官)を同道して、河田宅を訪れ、朝から夕方まで過ごす。⁷⁵⁾

この親密さは同じ鳥取藩士としてのみではなく、河田景与の弟であった故であろう(北垣は河田景与を日誌で書く場合には、必ず「翁」を付した)。

ところで、北垣と河田景福の関係が、単に同一藩士としての親しさ以上の意味が付されるのは、琵琶湖疏水工事に関係したと目されるからであろう。

ただし河田景福の場合、琵琶湖疏水に明確に態度表明をしたということを知ることはできない。しかし、「塵海」の1882年(明治15)年3月14日の記事のように、北垣および三人の京都府の官吏とともに小関越に同行するなど、親密さが目立つ。

午前七時発滋賀行、通水線点検。午前十時^(景福)河田大書記官ノ宅ヲ訪ヒ、同氏ヲ誘ヒ三井寺山麓隧道口ヨリ尾花川ニ傍ヒ、該川口ニ至リ湖辺ノ水量ヲ検シ本日水平尺、還テ三井寺ニ上リ、西南役戦史記念碑頭景色最佳ナル処ニ於テ午食ヲ畢エ、而シテ小関越半服ニ出テ、其左面ノ險阻ヲ攀ツ。是レ隧道線ナリ。之ヲ越エ小関小学校エ出、休憩。河田氏ニ分ル時、二時ナリ。是レヨリ運河線ヲ遂テ山科村ヲ過キ、天智天皇御陵ヲ拝シ、御陵ノ左ヲ攀チ、第二ノ隧道口ニ至リ、此線ヲ遂テ上リ、越エテ南禅寺ノ後エ出ツ。寺内ヲ北ニ過キ、隧道ノ末端ヲ点検シ、鴨河ニ灌ク運河水車線両水道ヲ検シ、又南蹴上坂ヨリ將軍塚ニ上リ、塚ノ東面ヨリ小関越・南禅寺山ニ隧道、及ヒ山科運河ノ大形ヲ概観ス。

午後六時將軍塚ヲ下リ帰邸。

本日随行、高屋六等属・角田九等属、御用掛渡辺華樵等ナリ。⁷⁶⁾

そして、その3日後の17日には、河田から北垣に対して、別所村・神出村について、上田・中田・下田ごとの売買地価額が送られてくる。⁷⁷⁾

このような北垣と河田景福について、織田直文氏は、「北垣と河田は、日曜日に家族ぐるみで交際する仲だったのである」と正確な把握をしながら、「河田景福については、滋

賀県に来る前は、度会県（今の三重県の一部）の県令をしていたことぐらいしかわからない」（度会県の県令は誤りで、事實は度会県大参事である一高久）としながら、「疏水完成についての滋賀県側の最大の功労者はむしろ河田景福だったと思う」と断定しているのは少し早計ではないか。⁷⁸⁾

北垣が河田と小関越をした1882年（明治15）の段階で琵琶湖疏水の計画の全貌が明らかになったとは言えず、琵琶湖疏水の計画が本格的に明らかになるのは1883年（明治16）11月5日に開かれた京都府勸業諮問会で開かれた「起工趣意書」が提示されて以降である。⁷⁹⁾ 1884年（明治17）3月7日から14日にわたって開かれた滋賀県勸業諮問会は、県令籠手田安定を会頭に開かれたが、疏水有害説が多数を占めた。それから1週間後の3月19日、内務卿山県有朋、農商務卿西郷従道あてに勸業諮問会の意見をまとめた上申書を提出した籠手田安定は、疏水からの障碍について滋賀県内に何の利益もないとしながら、予防方法（旱魃の時の湖水の減量予防）により被害の心配さえなければ疏水工事に反対するものではない、としたのである。⁸⁰⁾ 佐々木克氏によれば「滋賀県側の危惧にたいし、京都府が充分の対策をこうじる意思や態度を示すならば、疏水に対する反対論は、絶対反対というような方向とはなり得なかった」。⁸¹⁾

結局のところ、事態は2つの方向で一応の終息を見る。一つは、県令籠手田安定の「交代」である。1884年（明治17）7月9日、籠手田は元老院議員に任ぜられ、かわって工部大書記官であった中井弘が滋賀県令になった。河田はそのまま滋賀県大書記官の職にいて、中井弘滋賀県令をささえた。この滋賀県令交代劇そのものに琵琶湖疏水を推進する目的があったことを佐々木克氏は指摘する。⁸²⁾

もう一つは、1885年（明治18）年1月7日、大阪と滋賀の予防工事費を京都府が負担するならば、起案を許可し、補助金15万円を交付する、と山県内務卿から指令があり、1月29日琵琶湖疏水起工の特許を指令した。⁸³⁾

では、河田景福はどういう意向であったか。「塵海」の記述は、1884年（明治17）は、9月21日（日曜）は「午前河田景福氏来ル」のみである。⁸⁴⁾ この間の河田景福の動きはわからない以上、推測は差し控えたい。ただ明白なことは、河田景福はすでに明治初年以來北垣と親しい関係であったこと、そのことは琵琶湖疏水計画がまだ全貌がわからない1882年（明治15）に北垣と小関越に同行してもなんら不思議ではなかったことを意味している。

『百官履歴』下巻では、河田が滋賀県大書記官に任ぜられて以降の履歴は出ていないが、それ以降の経歴を滋賀県庁文書からひろってみよう。『自明治二十二年八月至明治二十六

年十二月 職員進退』(明え 149) に綴られている河田景福の「滋賀県大書記官」以後の履歴は2つの譴責が目につく。ひとつは、1881年(明治14)9月3日の「県監獄署内工業場修繕并囚監木柵新設等専断ヲ以テ着手候段不都合ニ付譴責ス」、もうひとつは1884年(明治17)4月5日の「県令代理中专断ヲ以テ十五年度賦金予算外支出取計候段不都合ニ付譴責ス」の2回である。前者は籠手田安定県令の時代であり、後者は中井弘県令の時代である。そしてこの2つの譴責の間、1883年(明治16)2月1日に「叙勲五等」の叙勲がある。そのあとの1886年(明治19)7月30日の「非職ヲ命ス」、つまり休職になり、1889年(明治22)8月3日「非職満期」となり、同年12月10日、「非職満期ノ処明治四年七月前満三年以上勤続ニ付一時金百三拾七円六拾九銭壱厘下賜」ということで正式に滋賀県大書記官を退くことになる。したがって事実上は、「非職」をもって河田の滋賀県大書記官の仕事は終わることになる。

河田景福が滋賀県大書記官を「非職」となる直前の1886(明治19)の「塵海」を見ると、むしろ河田と北垣の接触は増えたように見える。たとえば「塵海」の2人の接触は次のように多い。「川田景福氏来訪」(1月3日付)、「十二時藤尾村行、大津疏水線路買上地検分。県庁ニ出、中井県令ヲ訪フ。帰路、河田氏ヲ訪ヒ、午後十一時帰京」(1月19日付)、「消毒全ク終ル(母リキの一高久)葬儀ノ定日ヲ親戚、朋友ニ報ス。大徳寺老師来ル。河田景福氏来ル。墓地ヲ黒谷ニ選定セシム」(4月25日付)。「午前五時発大津行、中井、河田、井戸、益満諸友ヲ訪ヒ、疏水工事点検。帰路、藤尾村工事点検、石垣工事検査ノコトヲ指揮ス」(5月16日付、日曜)、「午前四時藤尾・小関・大津諸工事巡見、帰路河田氏ヲ訪フ」(7月18日付、日曜)、⁸⁵⁾と「非職」直前には、北垣との関係はむしろ密になるように見える。

1887年(明治20)5月4日の「塵海」には、「午後河田氏兄弟一家ヲ招キ小宴ヲ催ス」とある。河田景与が京都に来て、河田景福も一緒に京都で小宴を催したのであろう。⁸⁶⁾事実上退職の慰労会であろうか。

1889年(明治22)10月3日には、場所は京都であるが「三時退庁。河田景福氏ヲ訪フ」、とあり、府庁を午後3時に退庁してから、北垣は河田景福を訪れたのであろう。ここから推測するに、河田景福は少なくとも京都周辺にいる。しかし、11月4日には、「河田氏ヲ訪ヒ、昨日横浜ニ於テ協議会決定ノ旨ヲ告ク。午後一時内務省に出。」⁸⁷⁾これは、明らかに東京での話であり、河田景福は東京に出て来ていたのであろう。

それから、1894年(明治27)2月21日まで、河田景福に関する記述は「塵海」にはない。北垣が1892(明治25)7月、京都府知事を辞め北海道庁長官になった後の1894年

(明治27)2月21日の「塵海」に「京都自宅エ書留郵書ヲ送ル。及ビ熊谷勲郎・河田景与・河田景福エ送書」⁸⁸⁾とある。北海道に渡った北垣が、京都に自宅をおいていた点で興味深いのが、この時点でも兄の河田景与とともに、景福とも北垣が交流を持っていたことが知られる。北垣が北海道庁長官、そして拓殖務省次官を辞めて京都にいる時の1898年(明治31)1月14日も、「午後^(正声)足立・^(景福)河田・^(後測)森本会」⁸⁹⁾とある。

注目されるのは、北垣が貴族院議員時で京都にいる頃であるが、1901(明治34)1月7日付「塵海」に、次のような記事がある。「河田景福氏来り、滋賀県土木課長松田宗寿、元警部長中西秀夫、元滋賀郡長木村広凱ハ、疏水工事ノ際滋賀県庁ニ於イテ疏水交渉ノ事務ニ当タリ尽力シタル者ナルニ由リ、之ヲ記憶ニトドメンコトヲ乞ウ。コノ河田氏ノ請求ハ、京都府及ビ京都市ニ記憶ニ臨ムノ意ナランカ」。⁹⁰⁾この記事には、旧滋賀県大書記官河田景福が疏水工事の際、滋賀県庁において疏水交渉で尽力した人物として、滋賀県土木課長松田宗寿、元警部長中西秀夫、元滋賀郡長木村広凱の3人をあげている点である。ところで、1884年(明治17)6月1日改正『滋賀県職員録』(国立国会図書館デジタルコレクション)によれば、滋賀県令籠手田安定、大書記官河田景福、警部長中西秀夫、滋賀郡長木村広凱と記載され、松田宗寿は五等属となっている。この1か月後の7月9日には、籠手田は元老院議員になり、中井弘は滋賀県令になっている。また、1885年(明治18)1月1日改正『滋賀県職員録』では、まさに県令は中井弘、そしてそれ以外は、大書記官河田景福、警部長中西秀夫、滋賀郡長木村広凱、五等属松田宗寿で、中井以外は半年前の滋賀県職員配置と変化はない。⁹¹⁾要するに、籠手田安定そのものが、前述したように、琵琶湖疏水に絶対反対の立場ではなく、しかも1884年(明治17)7月に滋賀県令の交代劇がおこなわれ、しかも1885年(明治18)1月に大阪と滋賀の予防工費を京都府が負担するという流れになれば、滋賀県職員が琵琶湖疏水に反対の態度はとり得なかったろう。しかし、そうだとでも滋賀県職員がもともと琵琶湖疏水に反対であったかどうかは十分に検討する必要がある。

なお、『滋賀県職員録』は1886年(明治19)、および1887年(明治20)は現存していない。しかし、すでにみたように河田景福は、1886年(明治19)7月30日には「非職」、すなわち事実上滋賀県大書記官の職を退く。

「塵海」は1901年(明治34)1月16日が最後なので、それ以後はない。河田景福は、1906年(明治39)12月、齢72で死去した。⁹²⁾

3.2 河田景与

河田景与について、『明治維新人名辞典』は、「嘉永四年家督を継ぎ伏見留守居となり、文久三年京都留守居を兼ねる。京坂における鳥取藩の攘夷親征論の中心となり、同年八月十七日夜京都本圀寺における藩の重臣殺害事件を起し謹慎・幽閉などにあう。慶応二年同志と脱走して長州藩に投じ、明治元年東山道先鋒総督府参謀・大総督府参謀となり、賞典禄四五〇石を下賜された。その後翌二年八月以降兵部大丞・京都府大参事兼留守判官・弾正大忠・民部大丞兼福岡藩大参事・鳥取県権令・元老院議官等を歴任した。年七〇で没」⁹³⁾、と記す。

北垣が京都府知事になった時、河田景与は1878年(明治11)7月から元老院議官として東京在住であった。1887年(明治20)特旨をもって子爵を授けられた⁹⁴⁾。したがって、会う機会は弟の景福ほど多くはない。それでも、北垣が東京に行ったときには、しばしば河田景与を訪れていた。また、河田も出張で京都を訪れた際には会っていた。1882年(明治15)7月3日には「河田議官来訪。議官ハ五畿・山陰・山陽各府県巡回ヲ命セラレ、民情視察ス。既ニ山陽・山陰諸県ヲ終リ、帰途ナリ」⁹⁵⁾、12月海軍拡張のため地方官を東京に招集した際には、19日に「午後一時勝翁ヲ訪フ。又河田翁ヲ訪フ」。⁹⁶⁾1886年(明治19)2月7日、東京で地方官招集の際には「午前十時河田議官ヲ訪フ」⁹⁷⁾。その後も、北垣と河田景与は交流を深めるが、その交流に政治的意味合いは一切なさそうだ。⁹⁸⁾

1892年(明治25)4月9日には、伊藤博文の病氣見舞いの後「午後河田景与翁ヲ訪フ。翁、辞職ノ理由ヲ談ス」⁹⁹⁾とある。おそらく貴族院議員の辞任であろう。

それからは、おもに旧主池田家のことと河田景与の好きな刀剣の話に終始したようだ。1892年(明治25)4月27日、(東京)「河田翁ヲ訪ヒ、池田家ノコトヲ談ス」¹⁰⁰⁾。また、1896年(明治29)5月9日には、「九時河田翁ヲ訪ヒ、有俊刀ノ研ノ件、池田家十勝開墾ノ件ヲ談ス」。¹⁰¹⁾

しかし、1897年(明治30)には、河田景与も最期を迎えることになる。同年9月6日には足立正声から河田景与大患で北垣の上京を促す手紙があった。「河田翁大患ニ付池田侯爵家ノ件ニ付翁ノ囑託ニヨリ余ノ上京ヲ促セリ。河田翁大患ニツイテハ固ヨリ上東、侯爵家ノ事ハ勿論、百般ノ事ニ関シ談ヲ遂ゲンコトヲ日夜熱望スル所ナレドモ、如何セン、痔疾ノ治療未ダ歩行ヲ許サズ。ヤムヲ得ザルノ事情ヲ具ニ書シ、直チニ返書ヲ郵送セリ。人事意ノ如クナラズトハ此ノ類ナリ。」このため、北垣は長男確を東京に派遣した。9月8日付「塵海」には「確、東京ヨリ帰り河田翁ノ病状ヲ復命ス。河田翁ノ大患日ニ迫ルトノ報アレトモ、余モ亦痔疾治療ノ為メ、上東、翁ノ病ヲ訪ウコト能ワズ、故ニ確ヲ代ト

シテ翁ノ病状ヲ訪ハシメタルナリ。確ハ先月三十一日東京ニ着。其日病ヲ訪イ、幸イ病間ニヨリ面会、翁ノ衰弱甚ダシト云。其後先ズ依然同況ナリト云。¹⁰²⁾ さらに、9月11日には、足立正声より来書があった。これは6日の郵送書状の返書であった。かなり長い³が、全文を掲げよう。「去ル六日足立氏来書ニ河田翁大患日ニ迫ル。仍テ去月三十一日面会ノ時、翁ハ池田家ノ要件ニ生存中北垣ニ面議ヲ臨ム云々懇談アリタルニ付、無理ヲ押シテ上京スヘキ旨切ニ示セリ。余ハ痔疾ノ為メ無理ヲ押ス事能ワス。不得已遺憾ヲ忍テ足立氏ニ上京ナシ能ハサルヲ回報シ、且ツ河田翁ノ余ニ談セラレントスル条件ヲ問フ。由テ足立氏再此書ヲ送りタル也。

右書中河田翁ガ池田侯爵家ノ為メニシテ国道ニ談シ決定セントセラル、件、即チ足立氏ガ其病ヲ訪ウタル時、翁ガ之レニ依嘱セラレタル件ヲ来示セリ。熟読再三覚エス。涙下ル。翁病勢日ニ迫レリ。然ルニ翁ノ満胸惟池田家ノ前途ヲ慮テ^マ毫モ言々皆侯家ノ要事^マ毫モ自家ノ事ニ涉ラス。其至誠至公誰レカ感激セザランヤ。足立氏ハ維新ノ前ヨリ共ニ国事ニ関シ死生ヲ一ニシ、其ノ交情尤モ深シ。故ニ同氏ノ心情書中ニ溢ル、ヲ觀ル也。翁ノ意見尤モ緊要ナル者左ニ記ス。

沖守固ヲ協議員ニ加ウル事。

山田末次ヲ協議員ニ入レ、能ク^(池田)仲博公ノ信用ヲ得ルニ至リテ、重役ノ候補トナス事。右二条ニツイテハ各理由アリ、略之、山田末次採用ノ事ハ翁年来深ク心ヲ注キ、同氏ハ大事ヲ托スヘキ人物タル事ヲ信認セラレ^(ル)所ナリ。国道サキニ東京ヲ去ル時、翁ハ懇々山田ノ為人ヲ語り一面会スヘキ旨ヲ紹介セラレタルモ、帰期急ニシテ会シ得ザリシナリ³」。¹⁰³⁾

沖守固、山田末次が鳥取池田家の協議員になったかどうかはわからない。もともと沖の場合は協議員であったようであるが、何らかの事情（たとえば1891年〔明治24〕の大津事件）でやめていたのかもしれない。それにしても河田が死の直前になって旧池田家のことをまず考えるということは、池田家の圧倒的存在を考えるべきであろう。

この後、9月12日には「東京ヨリ河田景福返書到来。河翁病少シ善ト云」¹⁰⁴⁾ という記事がある。「塵海」にはこの年は10月1日までしか記述がない。河田景与は10月12日に齡70で没した。¹⁰⁵⁾

おわりに

最後に、これまでわずかに触れた旧藩主池田家を通じての鳥取人脈について触れてお

こう。ただし、旧藩主池田家を中心としたまとまりはこれまで十分な研究がなく、したがってここでは、「塵海」により断片的な事実を提示するにとどまる。

鳥取池田家は、幕末の当主慶徳（徳川慶喜の異母兄）が水戸家より養子として池田家に入り、幕末には尊王攘夷の姿勢を示すが、1875年（明治8）5月隠居し、次男の輝知に家督を譲った。しかし、輝知は1890年（明治23）2月30歳で死去し、男子がいなかったため、徳川慶喜の5男輝博を婿養子に迎え、後池田仲博と改名する。この仲博が貴族院議員や陸軍軍人を歴任しながら、1948年（昭和23）1月1日まで生存することになる。¹⁰⁶⁾

さて、1882年（明治15）12月23日、北垣国道は東京向島の公爵池田輝知邸で原六郎・勝部静雄・河崎真胤と会ったことは前述したが、「塵海」で見ると、この日の会合は池田家の家政を話すことであったが、ただし、池田家のことを話す際に「協議会」というような名称は使われていない。¹⁰⁷⁾

池田家の集まりで「協議員会」という名称が使われるようになるのは1889年（明治22）である。1889年10月11日、北垣は東上した。北垣の東上は、水害土木費補助要請が主要な目的であるが、嵐山民林買上げや東京で伊藤博文、松方正義、土方久元宮内大臣、あるいは勝海舟など多様な人間とあい、かなり長期間になった。¹⁰⁸⁾ その中で北垣は11月3日、横浜に行き、原六郎宅において「池田家協議員集会」に参加する。¹⁰⁹⁾ 名称は確定したものではないようであるが、北垣の「塵海」に登場するのはこれが最初である。「河崎真胤壺条協議」が議題である。要するに鳥取池田家に関する協議員の集会である。河崎真胤は、すでにみたように池田家の家令であり、第百銀行の役員（頭取のち取締役）をつとめていた。¹¹⁰⁾ 前日の2日に大蔵省・内務省・農商務省に水害土木費の陳情を行なった後、「午後沖守固、池田家集会ヲ約ス」とあるから、沖守固神奈川県令も出席したと思われる。¹¹¹⁾ 翌11月4日、北垣は、中村孝禧土木局長と水害土木費補助額8万4347円内定の前に、「河田氏（景福）ヲ訪ヒ、昨日横浜ニ於テ協議会決定ノ旨ヲ告ク」¹¹²⁾ とあるから、すでに述べたように、河田景福は1889年末には東京にいたようである。

鳥取池田家の評議会が活発化するのが、北垣が北海道庁長官時代の1894年（明治27）である。1894年5月26日、東京出張中「午後六時池田家評議員二会ス」、さらに7月14日に「池田家評議員会」とあり、具体的には「池田家協議員会ヲ精養軒ニ於イテ催シ、
（景与）（六郎）（正声）（義人）（真胤）（信義）
河田・原・足立・奥田・河崎・神戸・加藤諸氏会シ、十五国立銀行ノ件、朝鮮事件ニ対スル件、京鶴鉄道ノ件、ソノ他数件ヲ議ス」¹¹³⁾ である。さらに、7月27日には「午後富士見軒ニ於テ池田家評議会」で、議題は「十五銀行ノ件、軍資金献納ノ件」である。そ

の2日後の日曜には午後に池田家協議会が開かれる。前日には、朝鮮豊島沖海戦の勝報がもたらされ、29日の池田家協議会の2日後には朝鮮成歓陸戦の勝報がもたらされた日であった。¹¹⁴⁾ 1895年(明治28)7月7日には、「奥田義人來訪。池田家財政の談、伯州地所売増の得失、北海道植民計画の件」,¹¹⁵⁾とある。史料上では北海道庁長官時代の1894年、人的には池田仲博が当主になってから(1890年)池田家協議会が活発化するようである。

北海道庁長官時代の1895年(明治28)年7月から8月にかけて、北垣は、鉄道・港湾・排水・道路計画、すなわち「北海道大計画」をもって政府に陳情におよぶが、そのかたわら7月17日「午後五時池田家評議員会ヲ精養軒ニ催ス」。参加者は北垣のほかには河田景与・足立正声・奥田義人・河崎真胤・神戸信義で、この会では、「北海道開拓ノ事ヲ併セ議ス」とされた。¹¹⁶⁾ 北垣よりも24歳も若く、大正期には東京市長もつとめる奥田義人が池田家協議会に再三参加しているのは、伊藤博文へのルートを北垣に開いてもらったと伝えられることがあるかもしれない。¹¹⁷⁾

このような池田家による北海道開拓、すなわち「池田家開墾」の動きは1898年(明治31)にも「塵海」にはある。たとえば、「塵海」1898年(明治31)1月6日には、「十勝国中川郡利別池田侯爵家」の農場主任久島重義の農場各報告書ならびに水害報告書に対する返書を北垣が送った旨が記されている。返書で北垣は本年の大洪水は未曾有のものであり、その洪水点を標準とし、農場百般の経営をなし、将来水害防禦の策を討究すべき旨を語った。¹¹⁸⁾ 北海道池田農場は、これが初期の頃で、この場所が現在十勝ワインで有名な北海道池田町である。

このような鳥取を核としたまとまりが、その後どのように進んだか、あるいは進まなかったかははっきりとは見えない。1916年(大正5)1月16日、北垣国道は京都市上京区の寓居で79歳の生涯を閉じる。北垣の死によって、鳥取人脈は以前よりは強固なまとまりを維持はできなくなるのではないと思われる。ともあれ但馬の一農民に過ぎなかった人物が鳥取人脈の一構成員になる流れは、幕末から明治期という身分制解体の流れを示していると思われる。

注

- 1) 塵海研究会編『北垣国道日記「塵海」』(思文閣出版、2010年)、高久嶺之介・小林文広「〔解題〕北垣国道とその日記「塵海」について」。この「解題」は高久・小林で執筆したが、その中で「二 北垣国道の生涯」以降を高久が執筆した。京都府知事北垣の府政の特徴や北

垣の人物像について分析している。なお、北垣がかかわった事業については、拙著『近代日本と地域振興 京都府の近代』（思文閣出版、2011年）の「第一章 車道時代の到来—京都宮津間車道開鑿工事—」,「第二章 琵琶湖疏水工事の時代」で分析している。

- 2) 前嶋雅光『幕末生野義拳の研究』明石書店、1992年、142～144頁。
- 3) 青谿書院保存会『但馬聖人 付 その後の青谿書院』（青谿書院、1983年）16～28頁。原邦造編『原六郎翁伝』上巻、22～24頁（非売品、1937年）。なお、前掲前嶋雅光著は、5章構成であるが、「五 池田草庵と義拳」と題して、「封建権力の末端に連なる村落支配層の子弟として生を享け、封建教学を身につけた草庵は、ついに敬慕、攘夷をのりこえることは出来なかった」（207頁）とする。
- 4) 北垣が青谿書院を脱退する経緯について、『原六郎翁伝』上巻は次のように記している。「北垣晋太郎は、敢然先生の訓諭に肯んじないで青谿書院を脱退するに至った。この時、北垣の所説に賛同し、その行動を共にしたのは進藤俊三郎と西村哲二郎（但馬養父郡八鹿村北垣の親戚にあたる人、贈従五位）であった。先生は北垣を破門し進藤と西村を戒飭し、全塾生を集めて、かかる心得違いを起こさぬように涙を流して訓戒された。北垣らも先生の意のあるところを察して、同窓を誘わぬことを申し合わせたので、青谿書院からはその後一人の脱退者を見ず、後に生野騒動の時も流言飛節紛々として騒然たる中に平日の如く講学を続けていたということである」（27頁）。なお、北垣は天保7年（1836）8月生まれ、原は天保13年（1842）11月生まれ、西村は天保15年生まれである。
- 5) 西村は生野の変後さまざまな遍歴を経て北垣・原と同様慶応元年（1865）長州に走ったが、その後慶応2年（1866）1月、長州諸隊の集義隊に入った。同年夏集義隊で富田建笑院に屯宿の際、隊の一人が酔って隊規を破り、盆踊りの若者を寺の境内に入れた。西村は耳病をわずらっていたので、隊長佐々木男也の命令を知らずに行動し、佐々木は彼を幕府方の間者であるとして厳罰に処そうとしたことがあったようだ。7月27日夜西村は責任者として自刃した。北垣は石州方面に、原は小倉方面にいて、西村が兩人に相談する暇がない出来事であった（沢宣一・望月茂『生野義拳と其同志』〔東京堂、1932年〕、468～473頁、『原六郎翁伝』上巻、123～125頁）。
- 6) 『生野義拳と其同志』は、原は「京都に潜入し因州屋敷に居る松田正人の庇護を受け、名を『原六郎』と改めた。此の名は松田が選んだもので、此時農民の進藤俊三郎は忽如として、武士の原六郎と姿をかへたのである」としているが（468頁）、『原六郎翁伝』上は「（生野の変後—高久）松田正人が原六郎の名を選んだかどうかは未詳であるが、上京して松田正人を訪ねたことは事実である」（105頁）、とする。なお、原が明治元年に山国隊司令として事実上因州藩士同様の働きをしていたが、それは河田佐久馬との私的関係から出発しており、正式に藩籍に入ったのは明治2年（1869）5月である（同上、上巻、182頁）。なお、北垣国道の場合、塵海研究会編『北垣国道日記「塵海」』の〔付録1〕履歴・略系図によれば、文久3年（1863）のところに「何時の時点か不明であるが、この間同じ尊王攘夷運動を通じて出会う松田正人（道之、後の滋賀県令、東京府知事）の推挙を得て鳥取藩士になる」（595頁）とある。

- 7) 北垣国道「但馬一挙の真相」日本史籍協会編『続日本史籍協会叢書 維新史料編纂会講演会速記録』95～107頁。
- 8) 『原六郎翁伝』上巻, 63頁。原は, 1914年(大正3)年9月29日維新史料編纂会席上における講演でも, 「松田には私は今以て感服してゐる」(『原六郎翁伝』上巻, 301頁)と, 述べている。原は, さらに京都での因州藩の周旋方であった河田佐久馬を世話になった一人としているが, 原は, 生野の変後「其時分私は河田佐久馬の子分みた様にみられてゐた」と回想している(同上, 下巻, 300頁)。
- 9) 「京都に着いた其日先づ松田を訪ね, 次いで野村を訪ふた。野村は東山に行つてゐた。訪ねて見ると芸妓をあげて騒いでゐた, 腹が立つてたまらない。特に大阪長州屋敷のことがある。野村が長州兵を帰した訳ではないが, 我々がこんな苦心してるのに芸者をあげて騒いでゐる。怪しからんといふ氣になつた。
- それからこんな者をあてにしても仕方がない, どうしても自分の荷物を一刻も早く運搬して行かねばならぬ。それで田中(軍太郎—高久)・西村(哲二郎—高久)三人で, 行くことにした」(『原六郎翁伝』下巻, 292頁)。
- 10) 『北垣国道日記「塵海」』471～475頁の北海道鉄道予算の審議過程を参照。野村靖が「塵海」に登場するのは, 北垣が北海道庁長官以降である。
- 11) 森寛齋については, 政治家ではなく元来長州出身の絵師であり, 北垣の日記「塵海」でも登場回数は5回程度である。もともと「塵海」は絵画など趣味的記事は割合記載は薄い。しかし, 森寛齋の日記(京都府立総合資料館『京都府百年の資料 八 美術工芸編』1972年)では, 1885年(明治18)から1892年(明治25)の間に北垣および北垣関係者の記事は39回もある。森大狂『近世名匠談』(春陽堂, 1900年, 国立国会図書館デジタルコレクション)では, 文久3年(1863)の生野の変の後, 長州に潜行した北垣が, 奇兵隊に幕府の間諜と疑われ, 処刑されんとした時, 森寛齋が北垣を救ったことが記されている(124～125頁)。なお, 森寛齋が亡くなった1894年(明治27)8月19日の北垣の「塵海」には「亡友森寛齋翁」の言葉がある(『北垣国道日記「塵海」』430頁。ただし森の死亡日は6月2日)。
- 12) 修史局編『百官履歴』上巻, 日本史籍協会, 1927年, 245～248頁(国立国会図書館デジタルコレクション)。歴代知事編纂会編『日本の歴代知事』第一巻, 858頁, 第二巻(下)132頁。
- 13) 日本歴史学会編『明維新人名辞典』(吉川弘文館, 1981年)918～919頁。
- 14) たとえば明治5年(1872)4月7日, 滋賀県では区制が施行されるが, 滋賀県の区制は, 江戸時代の町村には何ら手を加えず, 郡の下に区があり, その下に従来からの町村があるというのが特徴的な点であった。また, 小学校の設立は県下一斉に設立されたわけではなく, 1873年(明治六)からゆっくり設立されていった(1873年の設立は1877年の1割程度)。要するに, 設立にあたって無理をしていない。もう一つだけ, 例を述べると, 松田は1874年(明治7)1月, 20項目にわたる「県治所見」を発表するが, その中の一つ「違式誣違ヲ制定スル事」に慎重な姿勢を示している。結局, 滋賀県は違式誣違条例(軽犯罪法)を, 松田が県令在位中のみならず, その後も制定しなかった(拙稿「明治前期地域研究のいく

つかの論点—滋賀県の事例から—』『年報近現代史研究』（近現代史研究会）第二号，鉦鹿敏子『県令 籠手田安定』中央公論事業出版部，1976年，123頁）。なお，滋賀県では，県令籠手田安定のもとで1882年（明治15）1月18日，甲第15号で違警罪を制定している。しかし，立小便や裸体や交通規制を含むものではなく，一般的な規制に留まっている（鉦鹿敏子編『史料 県令籠手田安定 I』中央公論事業出版，1985年，326～327頁）。

- 15) 『北垣国道日記「塵海」』21頁。
- 16) 同上，38頁。
- 17) 同上，5頁。
- 18) 同上，6頁。
- 19) 同上，7頁。
- 20) 同上，10頁。
- 21) 同上，9～10頁。
- 22) 同上，21～22頁。
- 23) 同上，30～31頁。
- 24) 同上，38頁。
- 25) 同上，42～43頁。
- 26) 北垣の母リキが琵琶湖疏水の完成を楽しみながら「類似コレラ性」により82歳で亡くなった時，「万恨無疆，痛悼無窮，腸断胸裂，嗚乎（呼）天ナル哉」「母公ヲシテ三年ヲ仮サシメハ，疏水工事ヲ落成必奏功，母公ノ望ヲ達セラルヘシ，万々一此病勢ヲ未然ニ駆逐ノ功アランカ，嗚乎（呼）悲哉」（『北垣国道日記「塵海」』172頁）という表現が使われている。また，北垣の父三郎左衛門は北垣が若い時なくなり，「塵海」には一切登場はしないが，母リキは時々登場する。亡くなった翌日，「類似コレラ性」のため，母を火葬にせざるをえない心境を北垣はこう綴る。「半井病院長・清水衛生課長，母公火葬ノ已ムヲ得エサルコト，又葬期ヲ速ヤカニセンコトヲ忠告ス，親子ノ情忍フ可ラサル所アリト雖モ，国道一府民ヲ統治シ且伝染病予防ニ付キ内務大臣ヨリ懇切訓示アルアリテ，即チ一昨廿一日，之レヲ管内ニ達セリ。今日姑息ノ情ニ泥テ小考ニ私シ，若シ誤ルトキハ，上ニ対シ下ニ対シ，職ヲ不忠不義ニ，終ニ大孝ヲ失フヘシ，是レ皆天ナリ，涙ヲ吞ミ忍フ可ラサルヲ忍ビ，未明ノ時，仮リニ火葬スヘキニ決ス。」（同上，172～173頁）。
北垣の母に対しては，生野の変後，北垣が母に対して苦勞をかけたという思いもあったろう。北垣の母リキは生野の変の破陣後，窮乏の極に達し，北垣の同志中島太郎兵衛家所蔵の平野国臣の著作『神武必勝論』上中下3巻の内の中巻を，太郎兵衛の子太四郎に泣き付いて譲り請け，これを八鹿の西村庄兵衛に買い取ってもらい，一時の危急をしのいだほどの貧窮ぶりとなっていたという（『生野義拳と其同志』11頁）。
- 27) 『北垣国道日記「塵海」』43頁。
- 28) 同上，43頁。
- 29) 同上，44頁。
- 30) 同上，47頁。

- 31) 同上, 79 頁。
- 32) 同上, 89 頁。
- 33) 同上, 90 頁。なお, 松平正直は, 「内務省にあつては松方正義, 松田道之と並んで「内務の三松」とうたわれた逸材」(『日本の歴代知事』第1巻, 372 頁, 1980 年)であったという。
- 34) 『北垣国道日記「塵海」』92 頁。
- 35) 同上, 94 頁。沖守固については, 天保12年(1841)6月生まれの, 鳥取藩士で江戸詰めの絵師であった沖一峨の長男として出生。はじめ画業を志すが, 攘夷論に共鳴し, 藩の外交の任を担った。明治元年(1868)記録応接方頭取につき, 同3年鳥取藩権大参事になった。明治4年岩倉具視特命全権公使に従つて欧米を視察するが, 英国滞在を願い出て8年にわたつて外国事情を研学した。1876年(明治9)年9月井上馨が欧州各国における財政経済事情の調査研究のためロンドンに到着し, 井上のもと当時留学中の横山孫一郎・原六郎・沖守固等が経済・貿易問題の研究を進めた。帰国後, 内務省少書記官, 群馬県大書記官, 外務省少書記官を経て, 1881年(明治14)年神奈川県令に就任。その後, 元老院議官の後再び長崎県知事になり, その後1891年(明治24)滋賀県知事になった。就任1か月後の5月11日ロシア皇太子遭難事件が発生し, 滋賀県知事を罷免される(この事件が起きたのは滋賀県大津であるが, その後の処理はおおむね京都で行われた。「塵海」は4月5日~6月30日の大津事件前後は現存していない)。しかし特旨により懲戒処分を解かれ, その後和歌山県知事, 大阪府知事, 愛媛県知事を歴任し, 1902年(明治35)に退官し, 貴族院議員となる。1912年(明治45)死去(歴代知事編纂会編『日本の歴代知事』第1巻, 921 頁, 1980 年, 第2巻(下), 136 頁, 241 頁, 1981 年)。
- 36) 『北垣国道日記「塵海」』94 頁。
- 37) 同上, 117 頁。
- 38) 同上, 415 頁。
- 39) 井上馨文書。
- 40) 『北垣国道日記「塵海」』536 頁。
- 41) 同上, 537 頁。
- 42) 同上, 542 頁。
- 43) 筆者もそのメンバーであった塵海研究会によって『北垣国道日記「塵海」』(思文閣出版)が公刊されたのは2010年である。なお, 仲村氏は宇佐美英機氏とともに『征東日誌—丹波山国農兵隊日誌—』を編集している(国書刊行会, 1980 年)。
- 44) 仲村研「原六郎と同志社」(『同志社談叢』第5号, 1985 年)7~9 頁。
- 45) 『原六郎翁伝』上巻, 304~305 頁。
- 46) 同上, 上巻, 195 頁。
- 47) 同上, 上巻, 305 頁。
- 48) 同上, 上巻, 304 頁。
- 49) 同上, 上巻, 309~310 頁。

- 50) 同上, 上巻, 327 頁。
- 51) 同上, 上巻, 334 ~ 335 頁。
- 52) 同上, 上巻, 336 ~ 337 頁。
- 53) 『北垣国道日記「塵海」』 31 頁。
- 54) 同上, 94 頁。
- 55) 同上, 239 頁。
- 56) 『原六郎翁伝』中巻, 535 頁。
- 57) 同上, 535 ~ 536 頁。
- 58) 『北垣国道日記「塵海」』 229 頁。
- 59) 同上, 244 頁。
- 60) 『原六郎翁伝』中巻, 536 ~ 538 頁。
- 61) 新島襄全集編集委員会編『新島襄全集』10 巻, 331 頁。
- 62) 『北垣国道日記「塵海」』 236, 239 ~ 240 頁。
- 63) 拙稿「新島襄と北垣国道」伊藤彌彦編『新島襄全集を読む』晃洋書房, 2002 年。
- 64) 仲村研「原六郎と同志社」『同志社談叢』第 5 号, 1985 年, 28 ~ 37 頁。
- 65) 田中智子「同志社大学設立支援の現実—誰がいかほどの寄付をなしたか—」『キリスト教社会問題研究』第 66 号, 19 頁, 2017 年
- 66) 『北垣国道日記「塵海」』 310 頁。
- 67) 同上, 358 頁。
- 68) 同上, 399 頁。また 23 日には、沖守固と同伴して鎌倉の井上馨病気見舞をした (4 頁)。ここでは沖と北垣という鳥取人脈の絆の強さを示している。
- 69) 日本歴史学会編『明治維新人名辞典』吉川弘文館, 1981 年, 309 頁, 328 ~ 329 頁。
- 70) 「従五位勲五等河田景福外一名特旨叙位ノ件」(国立公文書館デジタルアーカイブ)。
- 71) 『明治維新人名辞典』 29 頁。
- 72) 『百官履歴』下巻, 488 ~ 490 頁 (国立国会図書館デジタルコレクション)。
- 73) 『北垣国道日記「塵海」』 3 頁。
- 74) 同上, 18 頁。英国皇孫らの京都府の接待とその様相については、拙稿「明治前期の京都とイギリス皇族—一八八一年の異文化交流—」(ひろたまさき・横田冬彦編『異文化交流史の再検討—日本近代の〈経験〉とその周辺』平凡社, 2011 年)
- 75) 『北垣国道日記「塵海」』 28 頁。
- 76) 同上, 31 頁。
- 77) 同上, 32 頁。
- 78) 織田直文『琵琶湖疏水—明治の大プロジェクト—』かもがわ出版, 1995 年, 70—71 頁。
- 79) 京都新聞社編『琵琶湖疏水の 100 年<叙述編>』1990 年, 67 ~ 75 頁。
- 80) 同上, 107 ~ 108 頁。
- 81) 佐々木克「琵琶湖疏水の政治的背景」『滋賀県近代史研究』第 2 号, 1986 年, 24 頁。
- 82) 同上, 25 ~ 31 頁。

- 83) 『琵琶湖疏水の100年<資料編>』183頁。
- 84) 『北垣国道日記「塵海」』141頁。
- 85) 同上, 154, 156, 173, 178, 195頁。
- 86) 同上, 230頁。
- 87) 同上, 289～290頁。
- 88) 同上, 396頁。
- 89) 同上, 510頁。
- 90) 同上, 511頁。
- 91) 明治17年6月1日改正『滋賀県職員録』（国立国会図書館デジタルコレクション）。
- 92) 『明治維新人名辞典』309頁。
- 93) 同上。
- 94) 『日本人名大事典』第2巻, 213頁。
- 95) 『北垣国道日記「塵海」』42頁。
- 96) 同上, 92頁。
- 97) 同上, 161頁。
- 98) 1887年（明治20）4月27日には、「河田元老院議官来訪」（『北垣国道日記「塵海」』227頁）、5月1日には「親戚河田景与亡祖父忠正院義山実道居士五拾年祭施行ニ付、招状アリ。」（同上, 229頁）、それに付いての答礼であろうか、5月4日「午後河田氏兄弟一家ヲ招キ小宴ヲ催ス」（同上, 230頁）、1889年（明治22）10月、水害土木費補助申請のため東京出張の際には、14日「午後河田議官ヲ訪フ」（同上, 280頁）、1890年（明治23）1月1日には、「午後、藤本属東京ヨリ帰り、備前兼光ノ刀ヲ持チ来ル。コノ刀ハ非常ノ名刀ナリ。昨二十二年八月東京ニテ求メ、ソノ調整ヲ河田景与翁ニ托シタルニ、装製成リタルニ付到来セリ。鏝ハ河田翁ヨリ送ラレタル鉄ノ古作物ナリ。」（同上, 318頁）とあるが、1月6日には「河田景与翁ニ送書。兼光刀調製ノ謝礼。」と刀剣のことに終始している（同上, 319頁）。
- 99) 『北垣国道日記「塵海」』361頁。
- 100) 同上, 364頁。
- 101) 同上, 482頁。
- 102) 同上, 497頁。
- 103) 同上, 499頁。
- 104) 同上, 500頁。
- 105) 『明治維新人名辞典』309頁。
- 106) 霞会館華族家系大成編輯委員会『平成新修旧華族家系大成』上巻（霞会館, 1996年）、99～100頁。ウィキペディア「池田慶徳」「池田輝知」「池田仲博」。
- 107) 『北垣国道日記「塵海」』94頁。
- 108) 同上, 279～289頁。
- 109) 同上, 289頁。
- 110) 『明治人名辞典Ⅱ』上巻, かノ二十, 日本図書センター, 1988年（底本『日本現今人名辞

典』1900年)

- 111) 『北垣国道日記「塵海」』289頁。
- 112) 同上。
- 113) 同上, 422頁。
- 114) 同上, 424頁。
- 115) 同上, 462頁。
- 116) 同上, 467頁。
- 117) 鳥取仏教青年会編『因伯立志人物』1915年(国立国会図書館デジタルコレクション)。ただし、この書で、奥田が1884年(明治17)に大学卒業後、松田道之に添書を書いてもらって永田町の官邸に行き、そこで控室で北垣に会い、伊藤への紹介をしてもらったことになっている。松田は1882年(明治15)7月になくなっているから、松田が添書を書けるわけがない。なお奥田義人は、鳥取に生まれ、東京大学を卒業後、太政官御用掛として出仕、27歳で農商務省参事官、農商務省秘書官、特許局長、内閣官報局長、内閣書記官長をつとめ、1900年(明治33)10月第4次伊藤博文内閣の法制局長官兼内閣恩給局長に抜擢されるが、その後下野。1913年(大正2)年山本権兵衛内閣成立とともに、文部大臣、ついで司法大臣となりシーメンス事件で力を尽くした。その後もう一度野に下り、中央大学学長になる。1915年(大正4)東京市長になるが、1917年(大正6)8月21日死去(金田進編『鳥取県百傑伝』山陰評論社, 170～176頁)。
- 118) 『北垣国道日記「塵海」』508頁。

